

佐渡島における若者の祭りに関する意識調査

—祭りは佐渡の若者の島外流出を止めることができるのか—

菊 地 愛 美*・森 下 修 次

1. はじめに

新潟県佐渡市は佐渡島にある自治体のことで、佐渡市(行政)と佐渡島(地理)は両方の意味を含めて佐渡と呼称することも多い。佐渡市も他の過疎地や地方都市同様、年々人口が減少しており、若者の「佐渡離れ」が問題となっている。佐渡市出身の若い人に聞くと「佐渡には帰りたくない」という人と「いずれは佐渡に帰りたい」という人で分かれているものと思われる。また、しばしば話題になるのは佐渡島の人と自然に惹かれて佐渡市外から佐渡市に来て定住する人もおり、新聞記事等で話題になる。

佐渡の文化的特徴の一つはあらゆる地域で様々な祭りが盛んなことである。例えば佐渡を代表する芸能の一つ鬼太鼓は120以上の集落で受け継がれていると言われている。祭りは地域の多くの方々は何らかの形で参加する重要な行事である。そのことは行政や教育現場も分かっている、佐渡島内の学校では地域と学校を学ぶ重要な手立てとして鬼太鼓ははじめとする伝統芸能を教材として取り入れていることも少なからずある。しかし、こういった学習が若者の意識とどう関連しているのかははっきりしていなかった。そこで、佐渡市の若者の佐渡離れの原因と若者のこれまでの地域の祭との関わり方を調べ、関係性を明らかにするとともに、これからの祭の在り方について考えてみることにした。

2. 調査方法

平成26年9月11日から9月20日の期間でアンケート調査を行った。主として佐渡高校の卒業生を中心にE-メール等で送付した。アンケートは男性15名、女性45名の計60名から回答を得た。

アンケートの質問項目は次の通りである。

- a. 出身地はどこですか(相川・両津・佐和田・金井・真野・畑野・新穂・羽茂・赤泊・小木の10項目から選択)
- b. 現住所はどこですか(佐渡島内・新潟県内・関東圏・その他の4項目から選択)
- c. b.で佐渡島内以外を選択された方にお聞きします。将来、佐渡に帰りたいと思っていますか?
(「絶対に帰りたい、または帰る予定がある」「出来れば帰りたい」「どちらでもよい」「帰りたくない」の4項目から選択)
- d. b.で佐渡島内を選択された方にお聞きします。佐渡島外で暮らしたいと思っていますか?(「はい、または「いいえ」を選択)
- e. d.の理由はなんですか?(自由記述)
- f. 大学や専門学校等はどこでしたか?(佐渡島内、新潟県内、関東圏、その他、就職したの5項目から選択)
- g. f.で「就職した」以外を選択した方にお聞きします。そこに進学した理由はなんですか?(「学力の都合や、行きたい学校があったため」「その地域に行きたかったため」「経済上の都合のため」「その他」の4項目から選択)
- h. 佐渡にいた間(高校卒業まで)に地元のお祭りに参加したことはありますか?(「はい、または「いいえ」を選択)
- i. h.で「はい」を選択した方にお聞きします。それはどのようなお祭りですか?(自由記述)
- j. h.で「いいえ」を選択した方にお聞きします。地元のお祭りについて知っていることを教えてください。ない場合は「なし」と記入してください。(自由記述)
- k. 地元のお祭りは好きですか?(「はい、または「いいえ」を選択)

2017.6.26 受理

* 2008-2017 新潟大学教育学部在籍

1.k.の理由はなんですか？(自由記述)

たのはそのうち7名で、理由は以下の通りである。

3. アンケートによる結果

アンケートの回答による内容について、まず出身地は表1の通りである。佐渡の主要都市で人口の多い相川、両津、佐和田、金井が多く、新穂、羽茂、赤泊、小木は少なくなった。小木は当初の回答数が1しかなかったが、回答者に紹介してもらう等により回答数を増やすことができた。

- ・どこへ行くにも船に乗らなければならなくて、時間の調整が大変
- ・好きな洋服の店が無いから
- ・島外に出たことが無いから出てみたい
- ・島外には佐渡にないものがあるから
- ・やりたい仕事が佐渡に無いから
- ・島外に友人が多いから

表1 アンケート回答者の出身地

相川	両津	佐和田	金井	真野	畑野	新穂	羽茂	赤泊	小木
8	9	10	8	5	5	1	3	3	8

このうち、佐渡島外在住の49名に将来佐渡に帰りたいか、問いへの回答は表2の通りである。

「島外で暮らしたいとは思わない」と答えたのは4名で、理由は以下の通りである。

- ・大きく環境を変えて島外で生活するのは難しいから
- ・地元が好きだから
- ・佐渡での生活が楽しいから

表2 将来佐渡に帰りたいか

絶対に帰らない	出来れば帰りたい	どちらでもよい	帰りたくない
1	20	18	10

次は全員に地域の祭りに参加したことはあるかと問うた。「はい」と回答したのは57名で「いいえ」は3名であった。さらに、「はい」と答えた57名にそれはどのような祭りと聞いた結果が表3の通りである。

また、「将来佐渡に帰りたいか」「島外で暮らしてみたいか」の数値をグラフ化した(図1)。なお、佐渡市在住者に対する質問項目dで「佐渡以外で暮らしたいか」という問いに対し「はい」と答えた数を「帰りたくない」とし、「いいえ」と答えた数を「絶対に帰りたい」として合算した。

表3 参加していた祭り

相川	相川まつり(お囃子と太鼓)、神輿、獅子舞、佐渡おけさ、鉦山祭(民謡流し)
両津	湊まつり、七夕まつり(鼓笛隊)、夷まつり、鬼太鼓
佐和田	鬼太鼓、神輿、豆まき踊り、万灯まつり、獅子ヶ城まつり(パレード、マーチングバンド、花火大会)
金井	金井大祭(ブラスバンド、子供会での神輿)、中興まつり、豊年踊り、射手さん
真野	獅子舞、相撲祭り、新町祭り
畑野	春駒、佐渡おけさ、鬼太鼓、神輿、安寿天神まつり(国仲音頭)
新穂	鬼太鼓
羽茂	佐渡おけさ、神輿、鬼太鼓
赤泊	鬼太鼓、獅子舞
小木	小木まつり(花火大会、佐渡おけさ)、アースセレブレーション、大提灯、小獅子舞、大獅子、鬼太鼓

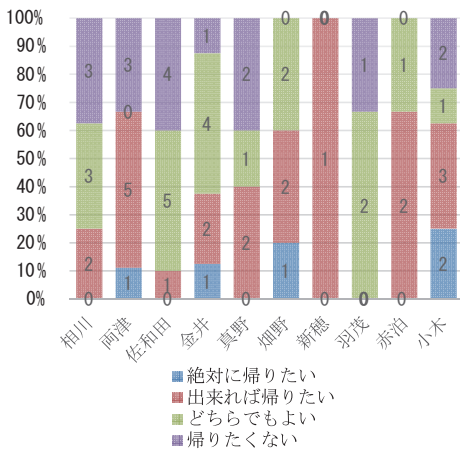


図1 出身地別帰島希望割合

また、佐渡島内在住の11名に「佐渡島外で暮らしてみたいか」と問いに「暮らしてみたい」と答え

全回答者に「地域の祭りは好きか」という問いに対して、「好き」と答えたのが46名であった。理由は以下の通りである。

- ・知り合いや友達に会えるから
- ・伝統や文化、歴史を感じることができるから
- ・地域が盛り上がるから
- ・みんなで協力してできるから
- ・郷土芸能（鬼太鼓、小獅子舞）が好きだから
- ・地域とのつながりを感じることができるから
- ・太鼓のリズムがDNAの中に刷り込まれている気がして、嫌いになれない
- ・夏が来た感じがするから

「好きでない」と答えたのが1名で、理由は以下の通りである。

- ・規模が小さく、知っている人だけで、その付き合いが面倒だから

どちらでもないと答えたのが13名で、理由は以下の通りである。

- ・特に思い出がない
- ・毎年恒例だから楽しくもないし、つまらなくもない
- ・祭の趣旨がよくわからないから
- ・学校行事として参加していたから
- ・参加機会が少なかったから
- ・絶対に参加したいという魅力的なものがないから

全回答者に小中学校での活動で佐渡の伝承芸能を体験したことがあるかと問いに対し「はい」と回答したのが59名、「いいえ」が1名であった。そして自身が演じることが出来るものはあるかという問いに対し39名が「ある」と答えた。その内訳は表4の通りである

表4 佐渡の伝承芸能で出来ること

佐渡おけさを踊ることができる	41
佐渡おけさの三味線や太鼓、篠笛ができる	4
小木おけさが踊れる	5
両津甚句が踊れる	1
国仲音頭が踊れる、歌える	1
鬼太鼓の太鼓や鬼ができる	5
能が舞える	2

「佐渡おけさが踊ることができる」という数が一番多かった。その理由は小中学校の運動会で生徒全員が佐渡おけさを踊るところが多いからだと考えられる。

最後に、全回答者に地域の祭に参加したいかとい

う問いに対して、回答は表5の通りであった。

表5 地域の祭に参加したいか

参加している	10
参加したいが、なかなか出来ない	30
どちらでもない	20

4. アンケート結果による分析

【学生・社会人別】

学生の方が「帰りたい」「出来れば帰りたい」と回答した割合が高く、半数を超えた。「帰りにたくない」と回答した数は学生と社会人で大きく異なり、学生約5%に対し、社会人は約30%となった。社会人はそれぞれの項目の割合がほぼ均等となっている。学生は将来が確定しないためにそう思ったと考えられるが、社会人は仕事や収入との関係によって意識が変わってくるのかもしれない。

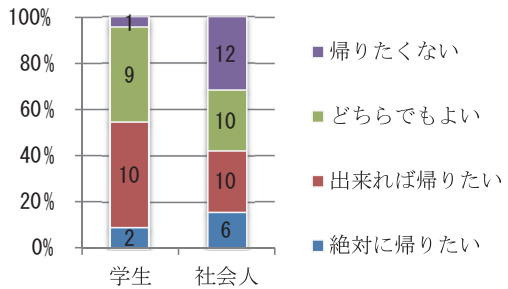


図2 学生・社会人別帰島希望割合

【現住所別】

「絶対に帰りたい」「出来れば帰りたい」の割合は新潟県内、関東圏、その他の地域、全てにおいて約40%となった。「帰りにたくない」は関東圏が一番高く約30%となった。やはり仕事や収入面で関東圏は帰島したくない事情が生じやすいのだろうか。

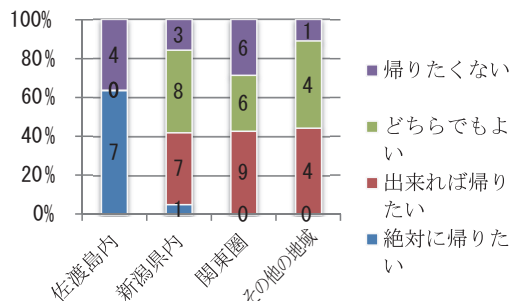


図3 現住所別帰島希望割合

【地元の祭が好きか】

祭が好きと答えた人で4つの項目に回答が分散している。対して、どちらでもないと答えた人は「どちらでもよい」という回答が最も多かった。

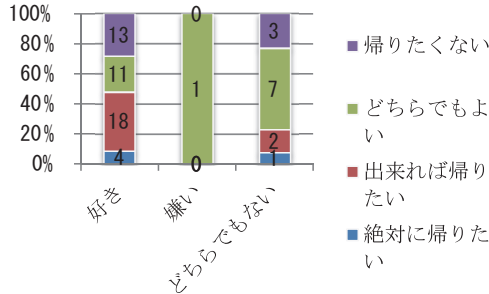


図4 地元の祭に対する意識別帰島希望割合

【地元の祭に参加したいか】

現在も参加している人と、参加したいが出来ていない人は「絶対に帰りたい」「出来れば帰りたい」の割合が高く、それぞれ70%と50%を占めている。対して、どちらでもないという人は「出来れば帰りたい」が約15%と低く、多くを「どちらでもよい」が占めている。

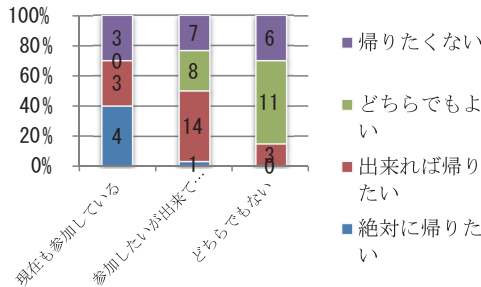


図5 地元の祭に対する意欲別帰島希望割合

【参加していた祭の形態】

回答者の祭を3つの形態に分類し、それぞれの分類ごとに回答数を集計した。①は地域内の地区毎に分かれてお神輿を担いだり、作ったりしていた祭(相川まつり、湊まつり、七夕まつり、万灯まつり、金井大祭、羽茂まつり)で、②は鬼太鼓に代表される、地域内の各家をまわる門付けを行う祭(両津、佐和田、金井、畑野、新穂での鬼太鼓)、③は火大会が行われるような旧市町村の大きな祭(鉦山まつり、獅子ヶ城まつり、小木まつり、アースセレブレーション)で、その他祭り「参加していない」という

人もいた。

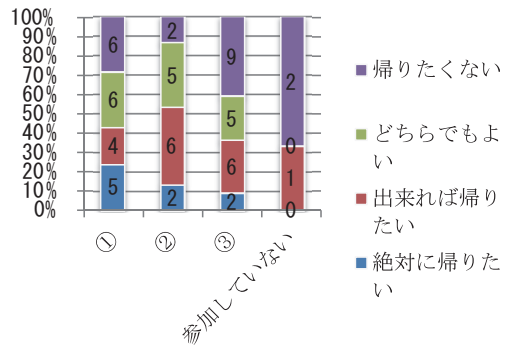


図6 参加した祭りの形態毎の帰島希望割合

【男女別】

女性は「帰りたくない」と「出来れば帰りたい」がほぼ同じ数で約30%を占めている。男性は「帰りたくない」と答えたのは1人だけで、「絶対に帰りたい」「出来れば帰りたい」が50%以上となっている。

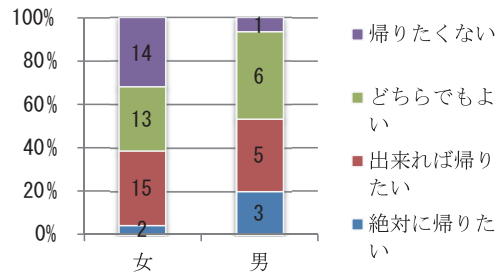


図7 男女別帰島希望割合

5. 聞き取り調査

アンケートに協力してくれた人の中から6名にインタビューを行った。聞き手は菊地が担当した(Q.と表示)。インタビューに応じてくれたのは次の6名であった。インタビュー実施は平成26年10月で年齢はインタビュー時の年齢である。

- ・Aさん(24歳女、両津湊出身、神奈川県在住)
- ・Bさん(24歳女、羽茂本郷出身、新潟県在住)
- ・Cさん(22歳女、金井新保出身、秋田県在住)
- ・Dさん(24歳男、金井吉井出身、新潟県在住)
- ・Eさん(24歳女、沢根箆町出身、新潟県在住)
- ・Fさん(24歳女、佐和田中原出身、新潟県在住)

回答者と地域の祭りの関連

【Aさん】

Aさんの出身地は両津湊は佐渡市東部にあり新潟港行きの佐渡汽船乗り場があり、佐渡の玄関口である。毎年5月5日、八幡若宮神社の祭礼にて鬼太鼓が行われ、湊地区全域を門付けする。神輿は大人と子どもで分かれており、一丁目や二丁目という分団ごとに全部で7つある。5月4日には前夜祭として、小学生の腕相撲大会や、大人は夜に分団対抗で出し物をし、順位をつけて競い、景品も出る。両津湊の人々にとってG・Wといえ祭の日という認識になっているようだ。Aさんは保育園から小学生にわたり、神輿に参加していた。中学生から高校生の女子はギャル神輿と呼ばれる神輿に参加し、大人から化粧をしてもらい、お金をもらっていた。男子は高校生からは大人の神輿に参加する。

両津湊は鬼太鼓が盛んな地域であるが、Aさんは以下のように言っている。

Q.「鬼太鼓は？」

A.「よくわかんないんだよね。ちっちゃい頃から習ってる人がやるのかな？別に地域でやるわけじゃなくて、習ってる人がやってる感じ。」

Q.「習い事みたいな感じ？」

A.「そうそう。鬼太鼓は習い事みたいな感じだった。別に地域の全員が出来るわけじゃない。」

Q.「父親がやってるから？」

A.「多分そうなんだと思う。鬼太鼓、どういふのでやるんだろって思った。だから私は鬼太鼓はできない。なんか急にある日『俺、鬼太鼓始めたんだ。』みたいな。『あ、そうなんだ』みたいな。」

鬼太鼓はどうすれば始められるのかわからないが、親が鬼太鼓をやっていると子どももやっているようだった。始める年齢も決まっておらず、小さいときからやっている子や小学生になってから始める子など様々であった。中学生から始める場合はないという。

隣の両津夷地区の夷商店街で様々な催し物が行われていて、川開きまつりとも呼ばれる祭りが前夜祭も含めて毎年8月6～8日に行われる。7日は小学生は小学校ごとに鼓笛隊パレードを行う。また、地区ごとにキャラクターなどの大きな山車を作り、歌を歌いながら町内を練り歩く。Aさんは小学生までは先述の鼓笛隊や山車パレードに参加していた。

参加していたのは旧東中学校区内の子どもたちで原黒地域だけは祭りの対象地域ではなく、両津港の

近くの地域のみとなっている。中学生になってからは参加することはなく、お客さんとして見に行っていた。

【Bさん】

佐渡市の南海岸に位置する旧羽茂町で、旧小木町寄りの地域である。羽茂大橋の祭りは毎年6月15日、草刈神社と菅原神社の祭礼として行われる羽茂まつりと同じ日に行われる。羽茂まつりは鬼太鼓、神輿、つぶろさし(新潟県無形文化財)、佐渡おけさ流し、鼓笛隊パレード、さらには夜には薪能もあり、芸能満載の祭となっている。

B.「羽茂祭の日に自分の地区のところにお神輿が来る。演奏する人と太鼓とか笛を吹く人が来る。お神輿を担いで来るんじゃない、すごい煌びやかなお神輿と神様みたいなのが一緒に来る。男の子が演奏して神様を讃えてるのかな？毎年それ(御旅所)にみんなでお参りするということをやった。」

Q.「それはどういう人がやるのですか？」

B.「男子っていう決まりがある。女の子はできない。絶対に男子じゃなきゃいけない。」

Q.「何人くらいいる？」

B.「笛何人かと太鼓2人くらいかな。でも今は地区に子どもがいないから、他の地区の方から来てもらっていると思う。他の地区も同じことをやってるのかな？ただ、来てるとこもあるし、来てないとこもあるから、どっかで括りがあるかもしれない。」

Q.「羽茂まつりはどうだった？」

B.「お店も出るけど、小学生の時は鼓笛隊で出たり、1～3年生くらいまではお神輿で出て、中学校になったら佐渡おけさを踊りながら町を巡るのを女子はやって、男子はお神輿かな。高校生になってからあまり行かない。あとはつぶろさしとか。」

Q.「つぶろさしとは何？」

B.「何なんだろうね。あれよくわかんない。」

現在は羽茂大橋地区に幼い男子がいないが、祭りは男子でなければならぬ決まりがあるため、同じような祭をしている他地区の子がやっている。Bさんは女性のため、この祭に参加したことはなく、羽茂大橋地区ではお神輿を見に行く程度であった。

【Cさん】

佐渡市の中央に位置する旧金井町。国道350号線沿いに位置し、佐渡市役所の隣の地域である。毎年4月15日、新保八幡宮の祭礼として鬼太鼓や射手(流鏑馬)が行われる。

- Q.「祭りは金井大祭しか参加したことない？」
 C.「八幡宮が家の近くにあり4月15日頃に祭があります。射手さんっていう、保育園年長頃の男児が馬に乗って弓を射る祭事があるが、参加出来るのは男子なので私は参加したことないです。」
 Q.「それをやるのは1人あるいは2人？」
 C.「1回のお祭りに1人で、まわりの笛とか太鼓の人はおじさんです。神社の敷地内を練り歩かっていうのはあります。」
 Q.「それは見に行くだけで感じ？」
 C.「そうですね。見に行って、屋台でなんか食べてって感じで、参加というよりはお客さんみたいな感じでいきます。」

射手さんは地区で一番幼い年長～小学3年生くらいの男子が1人選ばれる。保育園の年長～小学3年生くらいの男の子が選ばれる。まわりで笛を吹いたり太鼓を叩いているのは大人で鬼太鼓は青年団が行い門付けをする。高校生くらいからの若い男性が青年団に属し、祭当日は朝早くから夜遅くまで門付けが行われる。Cさんは自宅で母親や祖母とお寿司などの(門付けを持ってなす)ご馳走を用意していた。

また、現在は佐渡病院の病院祭と統合された金井大祭について次のように語っている。

- Q.「金井大祭で子供会でお神輿とは？」
 C.「多分神輿を担ぎは小学生だけだと思います。」
 Q.「子供会って、金井の中で地区ごとにわかれていますか？」
 C.「新保の中でも4つに分かれますが、新保で1基の神輿だったと思います。担ぐのは4～6年生くらいで、低学年の子はついて歩くだけだったと思います。形状は酒樽みたいなのを土台にして、ピカチューとかをまわりに布とかでみんなで作るんです。」
 Q.「夜などにみんなで集まって作ります？」
 C.「多目的センターみたいなのが地区に1つあり、

大人が材料提供や費用捻出をやってくれて、私たちは新聞丸めたり色塗ったりします。何回か集まる日があった気がします。金井大祭用に話し合ってます。役員日程予算や今年のキャラクターも決めてやったと思います。」

【Dさん】

金井吉井は旧金井町の中で両津寄りの地域で、元々吉井という地域があり、それが両津吉井と金井吉井に分かれている。

- D.「どんどやさんってわかる？竹みたいのをやぐらみたいに高くして組んで、そこに火つけて燃やすっていう意味のわかんない祭なんだ、年始にやるんだけど。」
 Q.「それってどんど焼きでは？」
 D.「祭なんだよ、俺らんとこ。祭っていうか、みんなが集まってわーってやるっていう。」

いわゆるどんど焼きだと思われるが、この地域にとっては皆が集まる大事な祭りとなっている。

【Eさん】

佐渡市の南部の真野湾を臨む旧佐和田町の相川寄りの地域である。沢根籠町のまつりは毎年4月15日に行われる。鬼太鼓だが、佐渡でしばしば全部の家を回るのではなく沢根籠町の要所要所で舞っていた。子どもがやるものと大人がやるもので分かっている。鬼は毎年男子が3人選ばれる。

- E.「(沢根籠町の祭は) 見に行くくらいかな。」
 Q.「でも門付けはするの？」
 E.「厳密には1軒1軒じゃなかった。ポイントポイントでやってたな。」
 Q.「じゃあEさんの家は来なかったの？」
 E.「うちは来てない。うちの近所に来てたから見に行くって感じだったよ。」
 Q.「じゃああんまり馴染みが無い？」
 E.「そうだね。1年に1回見るくらい。」

沢根籠町の鬼太鼓は門付けだが、厳密に全ての家をまわっていたわけではなかった。Eさんの家にはまわってこなかったため、近所に見に行っていた。中学生の頃までは見に行っていたが、高校生になってからは全く関わる事がなくなった。鬼太鼓は1年に1回見る程度だったため、馴染みは無いという。

Eさんの出身地沢根籠町の隣の地域の祭について、次のように言っている。

E. 「小学校を挟んで沢根籠町の反対側は、鬼太鼓があったかどうか分からないけれども、ヤーハンっていう祭りがあった。」

Q. 「ヤーハン？カタカナ？」

E. 「わかんない。トラックに座敷みたいなのが乗ってて、男の子が平安時代っぽい衣装を着て、お化粧して麻呂眉とか書かれてて、それで太鼓とか笛とか吹いて乗ってた気がする。」

沢根小学校を境として籠町の反対側ではヤーハンと呼ばれる祭りが行われていた。トラックに座敷のようなものを載せ、そこに男の子が平安貴族のような衣装を纏い、麻呂眉などの化粧をして乗り、太鼓や笛を演奏していた。現在でも行なわれているかはわからない。この祭も参加していたのは男の子だけだったようだ。

また、毎年8月11日に獅子ヶ城まつり（夏祭り）が行われる。佐渡の盆とも呼ばれる。河原田小学校のグラウンドに大きな縁日が催される。河原田商店街は国道350号線が通っており、昔からあるお店が立ち並んでいる。マーチングパレード、御輿の練り歩き、盆踊り、鬼太鼓などが催される。花火大会は音楽とのコラボレーションやレーザーを使用するなど、佐渡唯一の派手な演出が人気である。

Q. 「獅子ヶ城まつりは参加してた？」

E. 「参加していない。なんかおけさ流しみたいなイベントがあったような無かったような…。」

Q. 「なんか獅子ヶ城って花火上がるだけってイメージ。あとはイベントとか。」

E. 「河原田の人はでっかい障子紙みたいなので作った提灯を毎年地区ごとにやってるよね。」

Q. 「じゃあ特に佐和田の人は何もしないんだ？」

E. 「会場が河原田だからその人はしてるんだろうけど、沢根は何もしないよ。」

Q. 「中学校では何かしないの？」

E. 「吹奏楽かな。マーチングみたいな。」

獅子ヶ城まつりは佐和田の祭であるが、外部から見た限り花火以外は何をやっているのかよくわからない。沢根出身であるEさんは中学生の時に吹奏楽部でマーチングをしたくらいで、それ以外の関わりは無かった。河原田の人が万灯まつりの際に作った

万灯で優秀なものは会場に展示されていた。

【Fさん】

旧佐和田町の中心部に位置し、佐渡高校、裁判所、佐渡中央文化会館（アミューズメント佐渡）や様々なスーパー、カラオケ店などが並ぶ繁華街である。毎年4月27日、諏訪神社の祭礼で鬼太鼓の門付けと万灯の練り歩きが行われる。

Q. 「万灯まつりってどんな祭？」

F. 「河原田小の地区の祭で、地区ごとに分かれて提灯を作る。それを引っ張って町を練り歩く。」

Q. 「鬼太鼓もやる？」

F. 「やってたと思う。」

Q. 「それはどの地域の人たちがやってるの？」

F. 「中原地区でセーブオンの裏側の地域の人じゃった。その地域の女友達も太鼓叩いてた。クラスの男子とか鬼やってたしね。」

Q. 「Fのところは提灯作るだけなの？」

F. 「そう、提灯作って引っ張るだけ。」

Q. 「それは小学校入るくらいからは始める？」

F. 「私は3、4歳のときからやりました。中心になってやるのは小学生だけど、地域の人みんな来てもいいって感じで。その祭の際小1小2の子で男子は馬車みたいなのに乗って太鼓叩いて、女子は巫女さんの格好して踊る。」

Q. 「小学校3年生になったら提灯しかやらないんだ？」

F. 「(巫女の格好で踊るのは) 基本的に1年生だけなんだけど、人数が少ないと2年生もやってる人もいた？」

Q. 「小学校卒業したらもうなんにもしないの？」

F. 「しない。見に行くだけだね。」

河原田小学校区内の地域の祭。万灯は優勝や準優勝などが決まり、優勝に選ばれたものは獅子ヶ城まつりの時に河原田小学校のグラウンドに展示される。Fさんの地区は中原の中でも佐高通りと呼ばれるところで、その人は万灯を引っ張って歩くが、セーブオンの裏付近の地区は鬼太鼓を門付けしてまわっていた。そこでは男子のみならず、男女関係無く太鼓も鬼もやっていた。万灯を引くのは小学生が中心であった。Fさんは3、4歳の頃から参加してい

たが、地域子どもなら何歳からでも参加できた。また、万灯とは異なり、小学1,2年生の子だけ男の子は馬車のようなものに乗って太鼓を叩き、女の子は巫女さんの格好をして踊るものもあった。これは地区に関係無く河原田小学校区内の子は全員が参加する。祭の時期になると毎日夕方に神社に行き、稽古をした。中学生からは万灯まつりとは特に何も関わらず、お客さんとして見に行くだけとなる。

小学校中学校を通しての芸能との関わり

【Aさん】

- A. 「小学校で佐渡おけさ踊って、中学校総合的な学習の時間で調べたぐらいだね。」
- Q. 「佐渡おけさ踊るのはどうだった？」
- A. 「嫌だったよー。1年生のときはまだかわいげがあったけどさー。4,5年生とかピークで嫌だったよね。恥ずかしいじゃん、あんなくねくねした踊り。運動会で全校生徒で輪になってやるんだけどさ、めっちゃ長いじゃん、あれ。そんでいつの間にか終わるしさ。」
- Q. 「『どうしたら佐渡に帰りたかって思えるか』って聞かれてもピンと来ないよね？」
- A. 「だって帰らない。中学校のときからずっと考えてるんだけど、総合で佐渡の人口を増やすためにどうしたらいいか考えましようみたいなもの、3年間ずっとやってた気がする。名産とかいろいろなこと調べて、『佐渡はこんないいところがあるですよ』って発表し合った気がする。」
- Q. 「それでも別に『ふーん』って感じ？でも佐渡は嫌いではないんだよね？」
- A. 「うん。何もかも仕事が嫌になったら帰るかもしれない。引きこもるために帰るよ、佐渡に帰るとしたら。」

小学校では運動会で佐渡おけさを踊ったが、とても恥ずかしかった。中学校では、伝承芸能との関わりは無かったが、総合学習で「佐渡の人口を増やすためにはどうしたらよいか」を3年間考えた。佐渡の名産などを調べ、佐渡の良さを発表し合った。しかし、それでも佐渡にい続けたい、戻りたいと思ったわけではない。

【Bさん】

- Q. 「羽茂は結構佐渡おけさ盛んですね？」
- B. 「盛んだね。中学校の時はみんな踊って練り歩かされたし、小学校の運動会の時も踊らされた。」
- M.S 「中学校まではそれに向かって練習したりとかさ、意識させられてたけど。」

小学校では運動会で佐渡おけさを踊り、中学校では羽茂まつりに参加し、総合学習の時間で佐渡おけさの演奏や文弥人形をした。羽茂は佐渡おけさなど伝承芸能に力を入れており、学校でも祭に向けて稽古するなど学校として伝承芸能には力を入れていたという。しかし、Bさんは「練り歩かされた」「踊らされた」「意識させられてた」と言っており、活動に対して意欲的でなかったことが伺える。

【Cさん】

小学4年生から運動会で佐渡おけさを踊った。以前は違うものを踊っていたが、佐渡市になったあたりで佐渡おけさへと変更になり全員教えられた。また、金井音頭について、以下のように述べている。

- C. 「金井音頭っていうのもあるんですよ。金井音頭は秋の収穫祭で踊らなきゃいけないから習った覚えがあります。学習発表会みたいな学校の行事で…。金井音頭って超難しい。佐渡おけさは簡単じゃないですか。なので佐渡おけさは今でも踊れるんですけど、金井音頭はいつ踊ったのかもどんな振り付けだったのかもあんまり覚えてないです。」
- Q. 「金井音頭は祭とかでやらないのですか？」
- C. 「おそらく金井大祭でおばさんたちがやってるんですかね？全校で教えてもらったんですけど、ちゃんと出来る人はあんまりいないみたいないな感じでした。」

金井音頭が実際にどのように地域で踊られているのかもわかっていない。中学校の総合学習の時間では佐渡の伝統に触れようという授業があり、いくつかのグループに分かれて佐渡おけさの演奏をやったり能をやったり、佐渡のおとぎ話を調べたりしたそう。

【Eさん】

小学校で鬼太鼓をやったというEさんは以下のよ

うに述べている。

- E. 「小学校のときに1回だけやった。うちは運動会で鬼太鼓やるのよ。佐渡おけさやんないのよ。だから私は佐渡おけさ踊れないの。みんな佐渡おけさやるじゃん。それと同じ感じで運動会で鬼太鼓やるんさ。衣装とかは着ないよ。パチ持ってタスキかけて、それでみんなで並んで鬼太鼓っほいのを踊るっていう簡易的なやつなんだけど。」
- Q. 「太鼓は誰が叩くの?」
- E. 「太鼓は誰だったかな? まあ、それは運動会の行事みたいなのだから本格的では無い。祭は春にちゃんと衣装着て面かぶって、いろんな家まわってやるよ。子どもがやるのと大人がやるのとあって。基本的に男の子がやったんだけど、たまたまその年はやる人いなくて1回だけ駆り出された。毎年3人くらいやった。鬼が3人。太鼓は大人がやった。」
- Q. 「Dさんは鬼太鼓できるの?」
- E. 「全然覚えてない。だって小学2,3年生くらいときだよ。」
- Q. 「その時以外は全く関与せず?」
- E. 「そうだね。見に行くくらいかな。」

衣装は着ず、パチを持ち褌をかけた簡易的なものだった。しかし、小学校2,3年生の時にやったきりなため、今では全く覚えていない。中学校では特になにも関わりは無かった。みな、小中学校の活動において、何かしらの伝承芸能をやったり、佐渡のことについて調べたりしてきている。しかし、佐渡おけさ以外は今出来るものはなく、小学校の時に少しやっただけの状態となっている。また、それらの伝承芸能はほとんどが実際の祭ではやることはなく、学校行事でのみやっていた。

祭りに対するイメージ

【Aさん】

- Q. 「七夕まつりは7月だけ?」
- A. 「違う、8月7日。そう、私ずっと中学校高校まで七夕って8月だと思ってたんだよ。7月なんだね、ほんとは。笹の葉も8月の祭に合わせて飾るしさ。」
- Q. 「でも、給食とかで7月7日に七夕メニューとか出ない?」

- A. 「出るけど、1ヶ月早めてんのかなみたいなの。夏休みだから。」

Aさんは高校生まで七夕は8月のことだと思っていたほどである。両津では七夕まつりに合わせて8月に笹の葉を飾っていたため、さらにその概念が定着していたと思われる。毎年、今年はどのような山車を作ったのかと楽しみにしている。また、島内の祭のイメージに関しては以下のように言っている。

- A. 「中学校(の運動会)はフォークダンスだったよ。中学校では伝統芸能何もやってないよ。」
- Q. 「私の出身中学校(佐渡市相川)がそうだったから、みんなそうなのかと思ってた。」
- A. 「やっぱそれは相川だからじゃない? 伝統色強そうだよ。」

両津のAさんは、相川は祭や伝承芸能が盛んなイメージがあるが、金井などは全く祭のイメージがないらしい。なお、佐渡では新暦に合わせるのではなく、本来(旧暦)の季節に読み替えて行われる行事も多い。両津の七夕もその一つである。

【Bさん】

- Q. 「佐渡にいたときもそんなに毎年祭が楽しかったってわけではないですね?」
- B. 「はい。あっ今日だったんだみたいな。」
- Q. 「高校のときくらい? やっぱ出なくなってから?」
- B. 「そう。中学校まではそれに向かって練習したりとか意識させられてたけど。高校で意識が離れて、そういえば今日なんだね、みたいな。」
- Q. 「出てたときは祭好きだった?」
- B. 「やっぱ友達と屋台行って出かけたとかはしてた。うーん、多分祭ってというのがあんまりテンション上がんないのかな? 佐和田の祭とか、ほとんど行かない。行きたいともあんまり思わなかった。そういうこと考えると地元の方の方が行きたい。やっぱ安心するし。だけど高校一年生のときに、部活終わって帰るときに(注: Bさんは佐渡高校出身)祭やってて、羽茂高校の人も盛り上がってやってたけど、羽茂高校は羽茂高校でもう人間関係が出来上がってるから、佐渡高校の人は部外者じゃないけど、居づらい空気になってた。」
- Q. 「羽茂の生徒はみんな羽茂高校行くね。」
- B. 「うん、8割9割くらいは羽茂高校だね。」
- Q. 「それもあって祭はあんまり…って感じ?」
- B. 「今はいい。今はいいかな。」

佐渡高校のあった佐和田の獅子ヶ城まつりよりは地元である羽茂まつりの方が安心するから行きたいと思うが、今は参加したいというよりは、参加してもいいというくらいの気持ちだそうだ。毎年楽しみにしていたわけではない。高校で佐渡高校に来て、羽茂高校の人と心的距離ができてしまい、余計に祭に居づらい雰囲気になってしまった。

【Cさん】

佐渡にいた時はほぼ毎年、門付けに来る鬼太鼓の青年団の方に祖母や母親と一緒にご馳走を出していた。高校を卒業してからは、そんなに大きな祭ではないため、わざわざ祭のタイミングで帰省することはないそうだ。

【Dさん】

金井大祭に参加したことがないため、あまり祭には馴染みがない。大きな花火大会や鬼太鼓を見に行くことはあるため、祭は人との距離が縮まりとても好きだそうである。佐渡島内の祭に関しては以下のように言っている。

- Q. 「(金井吉井は) これ(どんどやさん) やるだけなの?」
 D. 「はい。祭って相川だけだよ。他に真野とか。」
 Q. 「真野は祭のイメージ無かったけれども、両津とか新穂も鬼太鼓やってる。金井も祭のイメージがないね。」
 D. 「無いね。」
 Q. 「金井大祭は?」
 D. 「病院祭になったかな、今多分。」
 Q. 「え、じゃあほんとにただの夏祭りって感じ? 出店があって…っていう。あれ、でも鬼太鼓あるの?」
 D. 「いや、やってたかもしれない…くらい。催し物でやってたかなっていうくらい。」
 Q. 「催し物ってことは他の地域から来てやってるかもしれないってこと?!」

祭のイメージがあるのは相川や真野だけで、その他の地域は祭のイメージがない。また、自身の出身地である金井の祭も金井大祭以外は知らないようだ。

【Eさん】

沢根の祭の前はわくわくする。鬼太鼓に出る人は学校を早く帰ったりしていて、普段と違う雰囲気があった。祭の日は夜も友達と歩いたりできるため、楽しかった。獅子ヶ城まつりは高校生の時までは遊

びに行くのは楽しかったが、今では知り合いに必ず遭遇するため、あまり行きたくない。

- Q. 「祭は好きでも嫌いでもないの?」
 E. 「好きでも嫌いでもないけど、人が多かっったり交通が規制されるのは嫌かな。なんか、この前、佐渡市役所の人のお話を聞く機会があって。鬼太鼓とかを通して地区ごとの集まりがあって地域活性化をしたりとか言ってたけど、私的にはあんまりイメージが無いというか…。地域ごとに集まって何かする機会って言って紹介してたけど、私的にそういう印象は無いなって。その人も佐渡の人だから間違いではないんだろうし、地域差があるんだろうなって思った。」
 Q. 「まあ、確かに祭に向けて集まって練習してる人にとってはそうなんだろうね。でもEさんみたいに当日見に行ってるだけだし、観光客とかと変わらないよね。」
 E. 「鬼太鼓で表現してるものが何か理解できないわけじゃん、子どもとかだと特に。厄払いや家内安全、五穀豊穰祈願の意味があるものなんでしょ?全然知らなかった。社会人になってから知った。ところで地域の祭り少なくなってるよね。」
 Q. 「若いしないと継ぐ人がいないからね。」
 E. 「そうね。やる人も意味がわかる人が少なくなってきた、やる意味もないならやらなくていいかなって思うけどさ。だからと言ってなくなっていい気もしないよね。うちは伝統工芸をやってるからさ、工芸品とか今の生活にそぐわないじゃん。他のところは今の生活に合うようにおしゃれな食器にしたり、デザインを今風にしたりしてさ。今の世の中に合うように進化して続けていくっていうところが多いけどさ。でも祭って、今の時代に合わせて進化とか無いじゃん。ずっと古いのを続けるわけでしょ?」
 Q. 「でも今の限界集落的なところでは、うちもゼミで参加してるし、鼓童の人が参加してたりするし。」
 E. 「外部の人ってこと?でもそれって地域の祭って言えるのかな?外の人とやって盛り上げて、それってただのイベントじゃん。複雑だね。」

- Q. 「地域の人にとってはそれでも無くなってほしいという想いがあるんだろうしね。」
- E. 「そう思ってる人がいるっていいね。熱心な人がいないとだめだね。」
- Q. 「地域にそういう人がいないと無くなるよね。」
- E. 「無くなるね。でも無くなくても困らないけどね。だからそういうのがある意義ってなんだろうねって思う。～中略～佐渡の人って『すっげー佐渡好き!』って人と『まあ、特に。ただ住んでるところ』って人というよね。あの温度差すごいよね。イメージだけど、相川の人地域色強いって言うか、地域への愛着あるよね。祭りとか。」

鬼太鼓など伝承芸能を通して地域活性化を、という話を聞くが、Eさんはそのような印象は全くもっておらず、地域差を感じている。鬼太鼓の意味も大人になってから知り、鬼太鼓がそれぞれの地域で違うものだという事知らなかった。祭や伝承芸能をやる人も意味を知っている人もどんどん少なくなっていく、無くなくても困らないものであるため、それ自体の意義は何なのかと考える。しかし、無くなってよいものではないとも思っている。

佐渡の人は「佐渡が大好き」という人と「ただ住んでいるところ」と思っている人の温度差が激しいイメージがある。相川の方は祭も盛んで、地域への愛着もすごいと感じている。

【Fさん】

獅子ヶ城まつりには佐渡に帰りたい。獅子ヶ城まつりの花火が好き。一番合わせて帰省したいのはアースセレブレーション。鼓童が外部とコラボレーションして行う城山コンサートが楽しみ。ハーバーマーケットのご飯や、あの時だけの佐渡じゃない雰囲気が好き。

佐渡での生活上の問題点

(1) コミュニティーが狭い

6人中4人が問題として挙げている。出掛ける場所が限られているため、どこに行っても知り合いに会うことが嫌だったり、直接自分の知り合いでは無くても親の知り合いに遭遇していると後から自分の親に「○○ちゃん、男の子といたわよ」などと報告されてしまう場合が多いため、嫌がる人は多い。島根県の大学に進学し、最近新潟に戻ってきたFさんは以下のように言っている。

- Q. 「他から聞いたけど、その子は佐渡の狭い人間関係が嫌だって言った。」
- F. 「それはある。それはすごい嫌だ。だってさ、すぐ噂広まるしさ、あれこれ言うしさ。封建的じゃん元々。なんか昔っばいって言うか、考え方が。だからたまに帰るくらいがちょうどいいのかもしれないよね。」

噂がすぐに広まったり、いろいろと考え方が古いというのも嫌な原因として挙げられた。また、同年代別のコミュニティーはさらに狭くなり、友人関係として見ると良い面が多いが生涯のパートナー選びの際にはあまり良いとは言えないかもしれない。

(2) 不便

これも6人中4人が問題として挙げている。神奈川県在住のAさんは以下のように言っている。

- Q. 「高校の時からずっと島外で暮らしたいと言ってたそうですね。」
- A. 「ずっと思ってた。佐渡から出たかった。なんでみんなそんな佐渡に戻ってきたいって言ってんだろって思ってた。別に悪いとこだとは思わないけど住みたくない。戻ってくるなら老後かな。若いうちは都会にいたいな。都会って言うか本土にいたいな。」
- Q. 「別に出かけたりしないなら新潟にいてもなあって思うけど。」
- A. 「私も引きこもりだけどさ。でも都会の方が気が楽だ。病院もコンビニも近いし徒歩圏内になんでもある。佐渡島内では遠い。コンビニ行くのに車使わなきゃいけないだよ!」

島内も広く、コンビニも旧市町村にはほぼ1軒ずつしか無い。佐和田などの繁華街に行けば様々なお店があり、新潟とさほど変わらない買い物出来るが、そこまで行くために必ず車が必要で、時間もとてもかかる。

また、(1)のコミュニティが狭いこととも関わるが、出掛ける際にお店の数も多く、都会の方が知っている人に会う可能性も低くなるため、気が楽だと言う。新潟県内在住のBさんは以下のように言っている。

- B. 「佐渡はほんとに不便だとは思う。自然が豊かだったり何もないところが佐渡のいいところなんだけど、仕事があまくいかなかったとき

にプライベートを充実させるのが難しくなっている。自分の好きなどっか出かけたり買い物に出かけたりっていうストレス発散方法ができなくなる。」

同じく新潟県内在住のFさんは以下のように言っている。

- E 「佐渡を出てみたらやっぱりいいなって。本土にいたい。だって服買いにわざわざ船に乗って行くんだよ？嫌だよ。陸続きだとどこにでも行けるもん。」
- Q 「私は逆にこっちの利点がわからないんだよ。」
- E 「例えばさ、旅行行く時とかさ、佐渡から出るとこっちから出ると全然違う？」
- Q 「確かにね。こっちだったら夜まで仕事してても夜行バスとか新幹線とか乗れるけど、佐渡だったらもう最終の船ないしな。」
- E 「だよ？船乗っても、さらにまたバスとか新幹線があるっていう。あと私、船が嫌なんだよ。酔うし乗るのが億劫。30分くらいでつければいいのにね。」

BさんやFさんのように、女性は特に洋服のお店が無く洋服を買いに行くためにわざわざ船に乗らなければならないことが嫌だと言っている。洋服に限らず娯楽施設なども少ないため、プライベートを充実させるのが難しいのではないかとされている。本土と違い、市外に出掛けるには必ず船に乗らなければならないため、気軽に旅行に行くこともできず、時間の調整も必要となる。

(3) 仕事・給料が少ない

佐渡で仕事に就こうと考えると、公務員や医療関係、介護関係を思い浮かべる。一般企業への就職は少なく、また給料も低い。東京の大学に通っていたDさんは以下のように言っている。

- D 「仕事だと思うよ。俺は最初帰りたくて、佐渡のUターンも行ってたんだけど。そこの年収だどう考えても子どもを大学までやるのはかなりきついし、家族を養っていくって考えると厳しいよね。」

大学卒業時にUターン就職を考えていたというDさんも給料の低さに諦めたという。結婚して子どもを育て、大学まで進学させることを考えると、佐渡で働くことはとても厳しいようだ。

(4) 佐渡という地に誇りをもてない

新潟大学を卒業し、現在も新潟県内で仕事をしているEさんは以下のように言っている。

- E 「なんか中途半端なんだよね。観光の島でもないし暮らすのにも便利でもない。町並みとかが綺麗で観光に力入れてますって言うんだったら住んで誇りももてるけど。なんかなー、佐渡おすすめの場所聞かれてもよくわかんないんだよ。」
- Q 「いっぱいあるっちゃいっぱいあるけど、観光地は。」
- E 「私が沢根に住んでるからっていうのもあるのかも。おすすめる場所全く無いじゃん。」
- Q 「んー、じゃああんまり佐渡に誇りをもてない感じ？」
- E 「佐渡、まだテコ入れ必要でしょ。」
- Q 「それはそうだけど。」
- E 「甘いよ、ブランディングみたいな。まあ、新潟県がそうだけさ。佐渡ってみんな名前知ってるくせにいざ旅行に行くって人はないんだよ。売りが無いんだよ。」
- Q 「新潟に比べたら佐渡の方がよっぽどすごいと思うんだけど。」
- E 「えー、どこが？」
- Q 「観光地いっぱいあるしさ。おいしいものは新潟と変わないけど。」
- E 「え、何があるの？」
- Q 「金山、尖閣湾…。相川だけで1日観光できるよ！」
- E 「そうなの！？でも金山ってつまんない？」
- Q 「でも以前島外の友人連れてったら楽しんでくれたよ。結構大学の友達連れてくことあるけどみんな楽しんでくれるよ。」
- E 「そうなのかな。卑屈になってるのかな、私。」
- Q 「私は佐渡のおすすめの観光地とか言えるし、そこがいいって思ってるから佐渡すごいって思えるのかな？」
- E 「そっかー、私があんまり観光してなかったっていうのもあるんだろうなー。」

また、Fさんは以下のように言っている。

- Q 「佐渡は外国人とか島外の人には好かれるね。」
- F 「都会の生活に疲れきって感じならまだわ

かるけど。それにしても新潟でも田舎などこっていっぱいあるじゃん。わざわざ佐渡って不便過ぎない？」

Q.「島がいいのかな？沖繩とかならまだわかるけどね。」

F.「マイナーだよね。」

観光地など、人に勧めるものがよくわからないという。Fさんは佐渡島内の観光地にあまり行ったことがないため余計にそう感じている。観光地があることはわかっていて行ったことがあっても、その魅力がわからず、つまらない場所だと思っている。外国人や島外の人で佐渡のことをとても気に入ってくれる人がたくさんいることもわかっているし、これまで学校で佐渡に関することを調べてはきたが、佐渡の魅力がいまいちわからない。特別に町並みがきれいで観光に力を入れているわけでもないため、あまり誇りをもつことができない。ポテンシャルはあるのにブランディングが甘かったり、何か企画しているものの巻き込み方が足りない。佐渡という名前は知っていても、実際に旅行で訪れる人は少ない。歴史や伝統、文化、自然など、素材はいいのにいまいち売り出す方向性が定まっていなと感じている。

6. 考察

佐渡島内の祭は鬼太鼓や佐渡おけさをはじめ各地域で様々なものが行われている。鬼太鼓は佐渡島内の120もの地域で行われている。両津や畑野、新穂ではその多くの地域が鬼太鼓を伝承している。これらの出身者の半数以上が将来佐渡に帰りたいたいと考えている。参加していた祭の形態から見て、門付けを行っている祭に参加していた人は半数以上が「絶対に帰りたいたい」「出来れば帰りたいたい」と回答しており、鬼太鼓や門付けが佐渡への愛着を形成する上で大きな働きをしていると考えられる。佐和田では鬼太鼓は盛んであるが、回答者のほとんどがそれに関わっていなかった。祭に関わっていると言っても獅子ヶ城まつりや万灯まつりが多く、伝承芸能との関わりが薄かった。「帰りたくない」「どちらでもよい」という回答が90%以上だった要因の1つとして考えられる。また、相川や羽茂、小木は佐渡おけさや小木おけさが盛んであるが、相川では「帰りたくない」が40%、羽茂では「帰りたくない」と「どちらでもよい」の回答のみとなっている。羽茂は回答者そのものが少ないので断定はできないが、相川でも羽

茂でも、小さい頃からおけさ流しなどで祭に参加し、地区ごとで活動していたが、地域への愛着を上回る他の要因があるのだと考えられる。小木は現在も佐渡在住で祭に参加している人も多く、「島外で暮らしたくない」「出来れば帰りたいたい」と回答したのが60%を超えた。

また、社会人の人は「帰りたいたい」「出来れば帰りたいたい」「帰りたくない」という回答の割合がほぼ均等であることが目立つ。「帰りたくない」と答えた理由としては、「やりたい仕事がない」という回答が多かった。学生は「帰りたくない」と答えたのが約5%であったため、学生のうちは佐渡に帰りたいたいと思っても、就職活動を経て島内で生活する厳しさを実感した人が多かったのではないだろうか。関東圏在住の人は約30%が「帰りたくない」と回答しており、一度関東で生活してしまうと、その便利さに慣れ、佐渡に帰りたくないと考えてしまうのではないだろうか。

「地元の祭を好きか」という問いに対する回答の理由を見ると、祭を2つの意味で捉えている人で分かれていた。それは<祭事>と<イベント>である。<祭事>は元来神仏に捧げるものであったり、五穀豊穡や子孫繁栄、無病息災などを祈るためのものとして存在していた。鬼太鼓や神輿はもちろんのこと、相川の鉦山まつりは鉦山の繁栄を祈願して始まったものである。対して<イベント>は人々が楽しむために行われるものである。同じ鬼太鼓をしても何のために演じているのかでこの違いが決まる。神仏や祈りのために舞っていれば<祭事>であるが、観衆のために観せるものとして舞っていれば<イベント>となる。祭が好きと答えた中でも、その理由が佐渡の伝統や文化の良さからくるものであったり、「一致団結する感じがするから」と人とのつながりからくる理由を答えた人は「帰りたいたい」「出来れば帰りたいたい」と回答していた。「なんとなく馴染みがあるから」や、「様々な催し物があるから」という理由を答えた人は「帰りたくない」と回答している人が多かった。前者は祭特有の良さをきちんと感じ取り、理解しているため、地元へ愛着をもつことができているのだと考えられる。対して後者は祭ではなく<イベント>として捉えている。同じように捉えている人は「年々内容がしょぼくなっているから」や、「島外の盛大な祭を見ちゃうと、地元の祭を楽しめなくなっちゃった」という理由で祭のことを好きでも嫌いでもないと答えている。

また、地元の祭に参加したいかという問いに着目

してみると、祭への意欲的な部分がより顕著に数字に現れた。現在も参加している人や、参加したいが出来ていない人は半数以上が「絶対帰りたい」「出来れば帰りたい」と答え、どちらでもないという人は佐渡へ帰りたいかという質問に対しても「どちらでもよい」と答えている。祭への意欲的な部分がそのまま佐渡へ帰りたいという意識につながっている。祭とは、人との交流の場であり、佐渡の良さを感じる場であると考えられる。

祭の形態ごとに考えると、地区ごとの活動や門付けの祭に参加してきた人は地域の人と関わる機会が多くなる。しかし、地区ごとの活動には神輿や山車を作ったりする祭も含まれているため、そのような参加の仕方では佐渡の伝承芸能と触れる機会は門付けよりも少なくなる。また、大人から教わって稽古をする鬼太鼓や佐渡おけさよりも大人とのコミュニケーションは少なくなるのではないだろうか。そして、神輿などのほとんどが小学生を中心としたものであり、中学生になってからは祭と直接的に関わることがなくなる。このことがさらに祭との距離を作ってしまう要因となると考えられる。大きな祭のみ参加と答えた人はおけさ流しのように祭の中に入って参加していたのか、花火大会や催し物を見に行くだけだったのかが定かではないが、「帰りたくない」と答えた人の多くが祭を<イベント>として捉えていた。そのため、佐渡へ帰りたいと考える人は門付け、地区ごとの活動、大きな祭の順で少なくなっていくのではないだろうか。

男女別に見ると、また違った祭の側面が見えてくる。今回の調査では女性のデータが多くなり、男性のデータがあまりとれなかったため必ずしもそうとも限らない可能性はあるが、女性の方が「帰りたくない」と答えた数が圧倒的に多かった。理由の多くは、「洋服のお店がない」や「不便」というものだが、これは、佐渡への愛着よりも都会的な便利さの方が優っていると認識しているためだろう。この男女の違いを生み出しているのは、女性の方がおしゃれや流行に敏感ということもあるのだろうが、「男は家を継ぐもの、女は外に嫁ぎに行くもの」という認識が未だ強いからだとも思われる。また、他の要因として考えられることは、祭の多くが男衆だけで行われることが考えられる。鬼太鼓の継承も今では両津春日などで少しずつ女性も受け入れられるようになってきたが、基本的には男性のみが参加できるものであった。祭が地域の人との交流の場であり、佐渡の良さを感じる場であるならば、その場を女性

は生まれた時から与えられていないことが今日的課題と考えられる。

インタビュー調査では、6人から話を聞いたが、地域の祭に関して詳しく知っている人はいなかった。金井新保のCさんや沢根籠町のEさんは直接参加しておらず、お客さんとして見る側だったため、余計にそうであったと思われる。中学生まで湊まつりで神輿、小学生の間七夕まつりで山車パレードに参加していたAさんはこの6人の中でも1番詳しく祭について語ってくれた。また、今回インタビューした6人中5人が鬼太鼓のある地域に住んでいたが、鬼太鼓について知っていた人は誰もいなかった。これは、鬼太鼓がまだ男性のみに継承されるものであるからだろう。インタビューした人の中で唯一男性だったDさんは鬼太鼓の無い金井吉井出身であったため、金井の他の地域の鬼太鼓についても何も知らなかったと考えられる。新保まつりの射手さんや羽茂大橋のまつりのように他にも男子のみが参加を許される祭は多く、祭に対して関心をもていない理由はここにあるのではないだろうか。佐和田や金井でも鬼太鼓は盛んに行われているが、DさんとEさんのように「祭が盛んに行われているのは相川だけ」と認識している人が多く、同じ町内に住んでいても各地域の祭に触れることは無いことがわかった。地域の祭はその地域だけに脈々と受け継がれているものであるが、それ故に閉鎖的になってしまっているのかもしれない。

湊まつりと七夕まつりに参加していたAさんや羽茂まつりに参加していたBさんは中学生まで、金井大祭に参加していたCさんや万灯まつりに参加していたFさんは小学生までしか祭に参加しておらず、それ以降はお客さんとして見に行くだけとなっており、そのような祭は他にも多いと考えられる。また、今回インタビューに応じてくれた人は全員佐渡高校の卒業生であった。佐渡高校は佐渡島内で最も生徒数多く佐渡全島から生徒が集まるが、佐和田に学校があるため、その近くの地域の生徒が多く、羽茂や小木など佐渡の南部地方から進学してくる生徒は少ない。そのため、羽茂出身であるBさんは羽茂から高校に通っていたにも関わらず、地元と疎遠になってしまっていた。同じように他の祭でも、高校進学をきっかけに地域の中に入ることができなくなる人は多いのではないだろうか。祭は人とのつながりを作る場であるが故にそれが悪い方向に作用してしまった結果である。

小中学校ではほとんどの人が佐渡の芸能を学んだ

り、佐渡の歴史や良さを調べたりという活動をしている。それでも「佐渡の良さがわからない」と感じている人が多いのは、ただ体験したり調べたりしているだけで、何も感じ取っていないからであると思われる。小学校では島内のほとんどの学校が運動会で佐渡おけさを踊る。そのために小学生のうちから佐渡おけさの踊りを練習するのだが、AさんやDさんのようにこれを恥ずかしいと感じている人は他にも多くいるのではないだろうか。嫌々やらされると感じていけば、佐渡おけさの踊りの意味を知ろうと思わないし、それが良いもの、佐渡の誇りであると思うこともできないだろう。小中学校での活動の仕方には郷土愛を育むために従来とは違ったアプローチが求められてくる。

今回の調査結果から、現在の佐渡市の祭と学校教育での様々な問題点が見えてきた。祭は小さい頃から参加してきた人たちにとっては地域の人々と交流を深める場として機能し、伝承芸能を伝えていくことでそれがより強いものとなる。そして、地域の祭や佐渡の伝承芸能の良さを感じることで、郷土愛が深まっていくと考えられる。しかし、今回のインタビュー結果からわかるように、祭には小学生までや中学生までしか参加していない人がほとんどである。高校生となり、佐渡高校の生徒は余計に地元から疎遠になり、地域の祭との関わりが無くなっていく。そして島外の大学や専門学校に進学し、島の不便さや人間関係の煩わしさを実感し、より佐渡への愛着が薄れていくのではないだろうか。また、それでも佐渡に帰りたいと思いつけていても、就職活動をし、将来自分が家庭をもったらと考えたと仕事や金銭面の方が佐渡への愛着よりも優先順位が高くなってしまふ。そうして佐渡の若者離れは進んでいくと考えられる。

今回、アンケートに答えてくれたのは圧倒的に女性が多かった。そしてその約30%が佐渡に帰りたくないと思っている。これは、大きな問題である。女性がいなければ人口は決して増えることはない。女性の多くは「佐渡には洋服の店がないから」「不便だから」という理由で帰りたくないと答えている。それらを上回る郷土愛をもっていないということだろうか。女性は祭に参加することが出来ない場合が多く、ただの観客であったり、門付けの際に自宅でご馳走を準備するだけの立場となる。参加していないのだから、祭の意味や伝承芸能の意味などわかるはずもない。アンケートに回答してくれた人の中で姉弟がいたが、姉は参加していた祭の内容を「佐渡

おけさ」と答え、弟は「神輿、鬼太鼓」と答えている。このことから、男女では同じ地域に住んでいても参加できる祭の内容が違うことがわかる。相川北狄(えびす)の祭では小学6年生の中から天狗の格好をする人と法螺貝を吹く人が選ばれるのだが、それは必ず男子でなければならなかった。その際の着替え等は神社の中で行い、女性は入ることは出来なかった。相川七浦の稲鯨の祭も男性のみが参加を許される祭であるが、そこでは祭だけでなく初詣も女性は行ってはいけないという決まりがあるようだ。このように、今でも祭りに女性が参加出来ない決まりは受け継がれている。佐渡には祭も伝承芸能も多く、歴史的に見てもとても価値のあるものが多い。しかし、それらの価値を理解することができなければ、佐渡に対して誇りをもつことが出来なくなってしまふ。現代はあらゆる場面でダイバーシティが求められている。ダイバーシティの本来の意味は「多様な人材を積極的に活用する考え方」である。地域の祭においてもこの考え方は有効であると考えられる。両津春日では、一時祭の存続が危ぶまれたが、女性も鬼太鼓に参加できるようにすることでこの危機を打開し今ではとても活気のある祭となっている。浜河内はムラ外部に祭り参加を解放することで活気を取り戻した。男性しか祭に参加できないということも伝統には違いないだろうが、これはかつて人が多くいた昔だからこそ通用していたことではないか。「祭って、今の時代に合わせて進化とか無いじゃん。ずっと古いのを続けてるわけでしょ?」とEさんはインタビューで言っていたが、時代に合わせた変化が今まさに求められている。女性の佐渡への郷土愛を育むために男性しか参加出来ないという「伝統」を考え直し、女性でも祭に参加できるようにするべきだ。

また、「コミュニティが狭い」や「考え方が古い」という点に対しても、祭の在り方が関係しているのではないだろうか。佐渡の祭は地域ごとに様々な祭がその中だけで脈々と受け継がれている。そのために、その中だけで人間関係が出来上がっていくと考えられる。隣の地域でどのような祭をしているか知らない若者が多いように、地域の祭は閉鎖的な部分もある。地域の人々の雰囲気は三者三様で、いわゆる余所者を歓迎してくれる地域と、あまり快く思われていなかった地域があるようである。佐渡は元々、日本中のあらゆる地方から人が移住してつくった土地である。隣接した集落であっても方言や文化、祭、住人の気質が異なっている理由はこのようなところ

からもきていると思われる。このような歴史が故に、世良い意味でも悪い意味でも地域ごとの狭いコミュニティが形成されたり、昔からの考え方が残っていくのではないだろうか。

学校教育においては、今までも総合学習などで佐渡の伝承芸能や文化、歴史について十分に触れてきた。しかし、現状を見ると地域愛に必ずしもつながっていないことがわかった。学校だけで学ぶだけでは限界があるだろう。芸能はただやるだけでは本来の価値をもたない。鬼太鼓であれば、ただ太鼓が叩けるようになって、鬼が舞えるようになって、それを学校内で発表しても、ただのパフォーマンスに過ぎない。小学生の時に学校行事で金井音頭を踊ったCさんも、金井音頭が実際にどのように人々に伝えられているのか、どのような祭で踊られているのかを知らずに学校行事で踊っていた。その結果、踊り自体が難しいこともあり、その場だけのものになってしまったと考えられる。本来地域の伝承芸能は地域にとって大切な意義があることが多い。学校行事で踊った金井音頭は意義が充分伝わっていなかったのではないか。また、実際にそれを地元の祭にもっていき授業の一環として参加しても、その時だけ参加したのでは意味がない。郷土愛を育む活動として、学校が地元の地域としっかり関わる必要があると考えられる。

また、アンケートで「島外に出てから、佐渡島の祭の面白さや歴史をより感じるようになった。」と言っていた人や、Eさんのように社会人になってからいろいろな人と話す機会を経て鬼太鼓の意味を知った人もいる。今まで佐渡で暮らしてきた自分では当たり前のことでも、島外の人から見るととても貴重なものである。今までと違う島の外からの俯瞰して佐渡を見ることで、新たな良さを発見することができる可能性もあるのではないだろうか。外部の人が感じたことを佐渡の人に伝えていく活動も有効であると考えられる。

Dさんのように佐渡市の将来のことを案じている若者はいる。佐渡市の若者離れを解消するための手立てとして、今一度地域の祭の在り方について佐渡の人々にも考えてもらいたいと思う。

7. まとめ

本研究では、佐渡市の若者離れの原因とこれまでの地域の祭との関わり方を調べた。祭とはその地域の人々の交流を深める場であり、地域の良さを感じられる場であると考えられる。これからの祭の在り

方について以下の課題点が挙げられる。

- ①小学生の間だけ、小中学生の間だけ祭に参加していた人が多い。
- ②学校で伝承芸能を習っても、学校で発表するだけであつたり、祭に参加しても数回で終わってしまう場合が多い。
- ③男性のみが参加できる祭が多く、女性は地域の祭に関わることが出来ない場合が多い。

これらの課題点を解消するために、

- ①学校と地域が連携し、小さな頃から出来るだけ長く地域の祭に参加できるようにしていくこと。
- ②男性のみであつたり、その地域だけで閉鎖的だった祭を、伝承芸能を守りながらも女性も参加でき、外部の人に対しても入口の広い、ダイバーシティの考え方を取り入れたものにしていくこと。

以上の2点を提案したい。

謝辞

本研究を行うに当たり、アンケートに協力していただいた佐渡市出身のみなさま、快くインタビューに協力していただいたみなさまに感謝致します。

文献

佐渡市公式観光情報サイトさど観光ナビ

<https://www.visitsado.com/>

新潟県公式観光情報サイトにいがた観光ナビ

<http://www.niigata-kankou.or.jp/index.html>

佐渡市役所ホームページ

<https://www.city.sado.niigata.jp/index.html>

(全て平成28年1月17日にアクセス)